

オーディオ実験室収載

バッハ盤を聴く(4)(HP 収載) —最新アナログシステムでの試聴(4)—

1. 始めに

前報(3)に引き続き、バッハのアナログ盤を聴き直していきます。

2. バッハのアナログ盤の試聴方法

試聴システムは LINN LP-12 の再構成(35)および ThorensTD124 の再構成(1)で報告したとおりであり、今回も 1970 年代後半以降の新興レーベルを ThorensTD124 で聴いていきます。その後、さらにアンチスタティックの効果(1)とアンチスタティックの効果(2)で報告したようにレコードアンチスタティックも加わっています。

今回は、東独とソ連時代のレーベルを聴いてみます。

MELODIA VIC 2053 (日本ビクター)

J.S.バッハ 無伴奏ヴァイオリンパルティータ
ギドン・クレーメル (ヴァイオリン)

MELODIA VIC 4006-7 (日本ビクター)

J.S.バッハ 無伴奏チェロ組曲
ダニエル・シャフラン (チェロ)

EURIDISK K16C-9130/1

J.S.バッハ ヴァイオリンソナタ
レオニード・コーガン (ヴァイオリン)
カール・リヒター (チェンバロ)

3. バッハのアナログ盤の試聴結果

MELODIA (日本ビクター) 盤は、ZANDEN のリストによれば、EMI、R、第4時定数 Low になっています。

MELODIA 盤の無伴奏ヴァイオリンパルティータは、EMI、R、第4時定数 Low で聴いていきますと、録音、盤質ともあまりよくありませんが、特に違和感はなく、クレーメルらしい、緊張感のある演奏です。

MELODIA 盤の無伴奏チェロ組曲は、EMI、R、第4時定数 Low で聴いていきますと、録音、盤質ともあまりよくありませんが、特に違和感はなく、地味ながらゆったりとしたテンポで、しっとりと聴かせる演奏です。

EURIDISK 盤は、ZANDEN のリストによれば、TELDEC、R、第4時定数 Mid になっていますので、この条件で聴いていきましたが、特に違和感はありません。盤質

はよくありませんが、コーガンのヴァイオリンも、リヒターのチェンバロも細身のすっきりとした音でしみじみとした演奏です。

4. まとめ

ThorensTD124の再構成(1)とアンチスタティックの効果(2)の結果をトレースでき、盤質や録音の問題を抜きにした演奏の様子が把握でき、二つのレーベルのイコライザー特性が特定できました。

以上